入選

勇気を出して

神奈川県　西中学校　二年
宮崎　琴羽

「困っている人を見たら、どうしたの？ 大丈夫？ って自分から声をかけて助けてあげられる人になろうね。」

幼い頃から、両親に言われてきた言葉だ。また、幼稚園に通っていた頃、教室に合った絵本で主人公が重そうな荷物を持っているおばあちゃんを見かけて、勇気を出して声をかけ、荷物を持ってあげたらおばあちゃんが喜んでくれた、という話を読んだことがあり、中学生になった今もよく覚えている。

しかし実際は、困っている人を見たら助けると頭ではわかっていても、それを行動に移すことはなかなかできないでいる。特に、見知らぬ人に声をかけるには相当な勇気がいる。恥ずかしがり屋な私は、声をかけたいと思いながらも、「やっぱりできない……」と身がすくんでしまうのだった。

ある日の夕方、一人で下校していたときのこと。すれ違った見知らぬおばあちゃんが、

「すみません。駅までどうやって行けばいいですか？」

と、私に尋ねてきた。おばあちゃんが不安気な様子だったため、私は緊張を少しでもほぐしてあげようと思い、優しく笑顔で話すことを意識しながら駅までの道を案内した。しかし、口頭で説明するだけでは不十分かもしれないと思い直し、勇気を出して、

「駅までいっしょに行きましょうか？」

と声をかけてみた。するとおばあちゃんは、

「自分で行ってみるから、大丈夫よ。優しいねぇ。本当にありがとう。」

と、言ってくれた。おばあちゃんが、最初に私に声をかけてきたときのよそよそしさがなくなり、リラックスしながら話しているのが、柔らかな表情からも見てとれた。

私がおばあちゃんの立場になって、考えながら話したことで、おばあちゃんの緊張がほぐれたのかもしれないと思い、嬉しくなった。私は、

「わかりました。駅までお気をつけて。」

と言い、おばあちゃんと別れた。その後も、おばあちゃんの後ろ姿が見えなくなるまで、心配しながらもどこか晴れやかな気持ちで見送った。

この体験を経て、自分の考えが変わってきた。今までは、見知らぬ困った人がいても自分から声をかけることが怖くて、私にはできないと思っていた。だが、おばあちゃんが一人で駅まで行くことを案じて、自分から「いっしょに行きましょうか？」と勇気を出して言えたことで、一歩先に進むことができた気がする。

見知らぬ人に自分から声をかけることは、確かに緊張するが、何も怖いことはない、と思えるようになってきたのだ。今回は、おばあちゃんから私に尋ねてきてくれたことがきっかけとなって、自分からおばあちゃんに一歩踏み込んで声をかけることができた。だが、これからはこの経験を活かして、困っている人を見かけたら、見知らぬ人であっても自分から声をかけることに挑戦していきたい。